

北海道建築士

HOKKAIDO KENCHIKUSHI 2026.05.No345

5月号

目次

これからの技術と青年建築士の役割	1
特集	2
・令和7年度北海道赤レンガ建築賞	
・令和7年度北海道赤レンガ建築奨励賞	
新入会員紹介	6
Coffee Break	7
information	8

URL <https://www.h-ab.com/>

これからの技術と青年建築士の役割

青年委員会 佐々木

誠（紋別支部）



令和8年3月21日に令和8年全道青年委員会連絡会議を開催しました。

今年から本部青年委員のメンバーが代わり、釧路支部の加藤委員長のもと、昨年の事業報告・今年の実業計画の説明や今年の5月に函館で開催する「青年建築士の集い」、10月に札幌で開催する「全道大会・青年サミット」について、開催内容や今後の展望などを含めて案内を行いました。



【全道青年委員連絡会議】

連絡会議後の研修会では公益社団法人日本建築士会連合会青年委員会委員長でもある株式会社 i x r e a（イクシリア）代表取締役の吉田浩司氏にBIMや建設DXに関する講演を行っていただきました。

確認申請においては2026年4月からBIM審査が導入されるという大きな転換点を迎え、建築分野はこれまでにないスピードで変化しており、特にAIの普及は単なる業務効率化にとどまらず、設計や施工、行政との連携のあり方そのものを変えつつあります。こうした状況の中で、青年建築士がどのように役割を果たしていくべきかを考える機会として今回の講演は非常に意義深いものとなりました。

これまで建築現場では、立場や業務領域の違いが連携の壁になることも少なくなく、現場を進めるうえで支障となっていました。デジタル技術が共通

言語となることで、設計・施工・行政がよりフラットにつながり、新しい価値を生み出す可能性があります。BIMやAIを活用した情報共有や意思決定のスピードは、従来のプロセスを大きく変える力を持っており、これを前向きに取り入れる姿勢が求められていると感じています。

また、実践事例を通じて未来の働き方を考えるという視点は、単なる技術導入の話にとどまらず、建築士としての姿勢や社会への貢献のあり方を問い直すきっかけにもなります。変化の激しい時代だからこそ、柔軟に学び続け、異なる立場の人々と協働し、新しい価値を創造していくことが青年建築士に求められているのだと思います。

その後の意見交換会では、会議の内容や各支部での活動などの意見交換をしたあと、チーム対抗「全道建築士大喜利大会2026」が開催され、建築にまつわるお題を基に名解答や珍解答が生まれ楽しい意見交換会となりました。

今回の連絡会議では、これからの技術が発達することで建築に関する働き方が大きく変わってくることを学びましたが、BIMやAIが発達してもそれらを使うのは人であることから、これからも青年建築士同士変わらずにつながりを大切に、お互いに協力し合いながらこれからの建築を担っていきたいと思います。



【青年委員会メンバー（中央：本間会長、菊地副会長）】

令和7年度（第38回）北海道赤レンガ建築賞

小清水町防災拠点型複合庁舎 ワタシノ

■建築主 小清水町
 ■設計者 (株)アトリエブノク、(株)山脇克彦建築構造設計
 ■施工者 北興、早水、斜里特定建設工事共同企業体
 エスケー・富樫特定設計工事共同企業体
 そうけん・東海林・長屋特定建設工事共同企業体

■建築物の概要
 所在地 北海道斜里郡小清水町元町2丁目213-4ほか
 主要用途 庁舎、自動車庫車庫、スポーツジム、ランドリー
 構造及び階数 RC造 地下1階地上2階建
 建築面積 2,783.03㎡
 延べ面積 4,213.41㎡
 施工年月日 令和5年(2023年)3月15日



(c) Ikuya Sasaki

□企画の特徴

昭和37年に建設されて以来50年以上の間、町の行政の拠点としてその役割を果たしてきた旧庁舎は、都度必要な修繕を行い機能の維持を図っていましたが、耐震診断の結果「大規模地震が発生した場合には倒壊または崩壊する危険性が高い」と判断されました。役場庁舎は、行政サービスの提供だけでなく、災害対策本部として堅牢さが求められることから、現状では町民の安全を守り、復興の拠点としての機能を果たせないと判断し、平成30年に建て替えを決定しました。新庁舎の整備に際しては、将来にわたり町の活力を維持するためには、人が集い、交流が生まれる空間がその源になると考え、単に耐震性能や防災機能を備えるだけではなく、町民のだれもが親しみを持って気軽に足を運んでくれ、自分らしいライフスタイルの発見につながり、ちょっとした特別な日常を感じてもらえる「にぎわいを創出する空間」を兼ね備えたまちの中心拠点となるよう計画をすすめました。計画に当たっては、豊富な温泉資源を施設内の床暖房やロードヒーティング、給湯の加温に活用し、内装には地域材を取り入れ、日照時間の長さを活かして自然光を有効活用するなど、自然豊かな町の特性をいかし、利用する全ての人にとって居心地の良い空間づくりを目指しました。「ワタシノ」という名前には、「みんなの場所でありながら、町民一人ひとりが主体的に活用する、ワタシノの場所になってほしい」という想いが込められています。

□設計の特徴

小清水町の中心市街地は、2つの河川の間を縫うようにつくられた商店街（国道）を軸に形成されています。防災の拠点となる新庁舎を整備するにあたり、先人のまちづくりの知恵に学び、河川の浸水エリアを回避した国道に寄り添う配置計画を採用しました。新庁舎には国道（東側）から直接出入り可能な歩行者動線を設ける一方、車利用者を中心としたメインアプローチは西側につくり、それらを「じゃがいもストリート」と称した開放的な内部動線で東西につなぐ明快な全体構成としました。1階には「にぎわいを創出する空間」として求められたカフェ、ランドリー、フィットネスジムを中心とした諸機能と、役場の主な窓口・執務機能を「じゃがいもストリート」を挟んで南北にレイアウトし、町民主体の空間として居心地の良さや利便性を両立する計画としました。一方2階には役場執行部及び議会機能をコンパクトに集約し、災害対策本部としての機動性に配慮しました。斜面立地である特性を活かすため、地階も重要なファサードとして捉え、国道側にガラス張りのギャラリー兼バス待合スペースを設けることで既存の街並みのアップデートを図りました。構造はRCラーメン架構を採用し、13.5m大スパン部にはPC梁を2.1mピッチで配する強靱でフレキシブルな骨格としました。さらに外装をPCパネルで四周覆うことで、堅牢かつ省メンテのディテールにより防災拠点としての配慮を徹底しています。一方、内部仕上げには小清水の地域性を象徴する土壁や木、光を透過するファブリックなど多彩な素材を織り交ぜ、無骨なコンクリートの空間を柔らかく包むように設けました。まちの将来を見据え、祝祭性を帯びた「ハレ」のにぎわいではなく、日常生活の一部として浸透し、お互いが干渉し合うことなく自然と共存するような、「ケ」としてのにぎわいが生まれることを願っています。

□施工の特徴

外壁材のPC板の取り付けに際しては、躯体に先行設置する取付アンカーの施工精度に特に配慮しました。サイズが大きいため他工事との干渉を避け貼付手順の工夫に加え、施工図はサッシや金物類との取り付け等について綿密に打合せを行い作成しました。仕上げについてはコンクリートの風合いが残るようピースごとの適度なムラを活かして細かく現場での色味調整を重ねました。全体を通して短期間の工事を進めるにあたり、発注者・設計監理に加えさまざまな関係者との打合せが滞ることが無いよう留意しました。冬季の作業においてはコンクリート強度や外壁塗装の品質確保のため、採暖養生の徹底を図りました。

□完成後の地域への貢献度等

「ワタシノ」には役場機能以外にも、ランドリーやフィットネスジム&スタジオ・カフェやコミュニティスペースなど、役場施設を「用事がないと行かない場所」から「日常的に来たくなる場所」へと、身近で町の中心的な存在にアップデートするような機能を併設しました。にぎわいエリアには、テニスクラブや学生の自習、趣味やサークルなどの集まり、友達との待ち合わせなど、日常的に目的の有無にかかわらず多くの人が訪れており、目的としていたにぎわいの拠点としての役目を果たしつつあります。また、いつも利用しているモノやサービスを、日常時はもちろん、非常時にも役立つようにデザインしようという考え方で、「日常時」と「非常時」という2つのフェーズをフリーにする「フェーズフリー」の概念を取り入れ整備し、フェーズフリーアワード2024の事業部門では、公共施設をフェーズフリーにすることで、地域の活性化とレジリエンス向上につなげるモデルケースとして高く評価され「シルバー賞」を受賞しました。防災拠点としての機能や設備を職員が確認するためだけではなく、町民にも参加を呼び掛けて200人規模で防災訓練を開催し、一時避難所としての初動対応、設備の操作手順の確認、避難者の受入方法や必要なスペースの確保、非常食の試食、フェーズフリーの機能性を確認、更には町民にも参加してもらうことで各地域の自治会が組織する自主防災組織の活性化にもつながりました。訓練で浮かびあがった課題を、小清水町および施設運営をになうNPOと連携企業により検討・改善することで、安全安心なまちづくりにつなげています。



□受賞のことば

建築主 小清水町長 久保 弘志

この度は、小清水町防災拠点型複合庁舎「ワタシノ」が、荣誉ある令和7年度赤レンガ建築賞を賜ることになり大変光栄に存じます。

「ワタシノ」は、町のにぎわいと持続可能なまちづくりを目指す複合施設として、単なる行政サービスの拠点ではなく、町民が集い、交流し、関係性を築くことで、地域の活力を生み出す「にぎわいの創出」を目指し整備いたしました。愛称の「ワタシノ」には、「みんなの居場所でありながらも、私の居場所として町民一人ひとりが主体的に利用できる場所であってほしい」という願いが込められています。

また、フェーズフリーを取り入れ、日常時はカフェやランドリー、フィットネスジムで気軽に集い、交流し、快適に過ごせる場所として、非常時には、避難者の受入や炊き出しに加えて、シャワーやランドリーで衛生環境の維持を図ることができる一時避難場所として、町民の安心・安全を支えています。施設のメインの暖房には、本整備にあわせて掘削した温泉熱を活用し、CO2排出量・ランニングコストの削減だけでなく、冬季の災害時でも、安心して暖かく過ごすことのできる空間を提供することができます。

このたびの受賞を一層の励みとし、「ワタシノ」を拠点とした更なるにぎわいの創出を目指し、町民が幸せを感じ、笑顔で安心して暮らせる小さくても素敵なまちになるよう、これからも尽力してまいります。

設計者 株式会社アトリエブंक 村國 健、尾辻 自然

この度は、大変名誉ある賞を頂き、多くの関係者のみなさまに厚く御礼を申し上げます。

小清水町防災拠点型複合庁舎「ワタシノ」は、役場、保健センター、公民館、商工会事務所に加え、フィットネスジムやカフェ、ランドリー機能を併せ持ち、一見無関係とも思える機能同士が、「フェーズフリー」というキーワードを介して複合された全く新しいプログラムの複合役場庁舎です。

従来の建築計画では例をみない機能の組み合わせでしたが、まちの方々や関係者との対話を繰り返し、「日常」と「防災」をめぐる複雑な状況を丁寧に解きほぐしながら、検討を重ねました。町長はじめ職員の皆さまの献身的かつ積極的な姿勢、まちの将来を憂う町民の方々の真摯な言葉によって大変勇気づけられ、ひとつのかたちにまとめ上げることができました。

弊社はこれまで、幾つかの庁舎建築で当奨励賞を受賞する機会に恵まれましたが、「ワタシノ」の設計において大賞を受賞できたことは、北海道内の庁舎建築のあるべき姿が総括できた結果なのではないかと思っています。

「ワタシノ」がその言葉通り、町民ひとりひとりの大切な居場所となることを願ってやみません。設計者として、このようなものづくり・まちづくりの機会に携われたことは望外の喜びです。

施工者 「北興・早水・斜里特定建設工事共同企業体」

代表者 株北興 代表取締役 三沢 利晃

この度、小清水町防災拠点型複合庁舎「ワタシノ」が荣誉ある北海道赤レンガ建築賞を受賞することとなり、建築主体施工者の代表者として衷心より御礼申し上げます。

新庁舎は「フェーズフリー」という概念のもと、防災機能とコミュニティ機能を併せ持った複合施設建設の一翼を担わせて頂いたことを光栄に思うとともに、工事竣工までの期間、近隣住民のご理解とご協力をいただき、また小清水町役場関係各位をはじめ、工事に係る様々な方々のご指導ご鞭撻を賜りながら無事故無災害で完工できましたこと、改めて感謝申し上げます。

この庁舎がこれからも小清水町の防災と地域の絆の場の拠点として町民の皆様へ愛される施設となるよう願っております。また、我々も今後とも地域に貢献できるよう地域に密着して参る所存です。

令和7年度（第38回）北海道赤レンガ建築奨励賞

東神楽町複合施設「はなのわ」

- 建築主** 東神楽町
- 設計者** (株)藤本壮介建築設計事務所、ドーコン・創明建築設計事務所共同企業体（(株)ドーコン、(株)創明建築設計事務所）
- 施工者** 橋本川島・西山・大洋・高橋興業種特定建設工業共同企業体（(株)橋本川島コーポレーション、(株)東成建設、(有)長田組、(株)山本建設、(株)西山電設、(株)東神楽電気、(有)山菱電気工業、(株)大洋設備、(株)北伸設備工業、(株)柳沼、(株)カサイ住宅設備、(株)高橋建設、(株)小廣川建設

- 建築物の概要**
- | | |
|--------|-----------------------|
| 所在地 | 北海道上川郡東神楽町南1条西1丁目3番2号 |
| 主要用途 | 庁舎、診療所、集会所 |
| 構造及び階数 | RC造 3階建 |
| 建築面積 | 6,710.24㎡ |
| 延べ面積 | 9561.4㎡ |
| 施工年月日 | 令和6年(2024年)3月1日 |



□企画の特徴

町内の関連団体の代表者など20名で構成する「公共施設等集約化検討委員会」を設置し集約化する機能やその効果など詳細について、内容を検討していただき、基本計画として取りまとめました。基本計画については、関係団体とのヒアリングやパブリックコメントの内容を踏まえて、適宜修正を加えて、町議会での説明後に最終決定しました。基本計画では、これまで旧役場庁舎のあった敷地での整備ということで、町のシンボルとなるような施設にすること、機能を集約化し、複合施設として整備することの相乗効果として、賑わいが生まれるような施設とすることなどを位置付け、町民に親しみのあるこの敷地で50年後、100年後も町民の皆さんに愛され、親しみが持てる施設になるように事業を進めました。

□設計の特徴

色彩や形状が全く違う既存の役場庁舎と図書館を残して、それらを含む建築群で、東神楽町のシンボル（顔）となるようにすることが難しいと考え、基本設計者は、町のイメージとも調和する樹木で建築群全体を囲むように植えて、それをシンボル（顔）になるように設計しました。また、そのシンボルの内側に円形の回廊を整備し、それに沿って、集約化するさまざまな機能を設けることで、敷地のどの方角からもアクセスすることができ、完全な屋内とすることで天候にも影響されずに利用でき、自分の目的以外のさまざまな出来事が視野に入ること知的好奇心を刺激する場所になり、期待していた賑わいが生まれることが期待できる設計としています。これらの設計プランをデザイン性の高いシンプルな色彩や形状で統一感を表現し、サイン計画も全体のイメージに合わせて設計していること、また、花のまちづくりに取り組んでいる町として、施設前面には、駐車場ではなく、樹木に囲まれるガーデンを計画しました。

□施工の特徴

敷地内にあった既存の診療所や役場庁舎を使いながらの建設工事となるため、4つの工区に分けて、整備して完成した施設を仮使用し、既存施設を解体して次の工区の整備に入るという形で工事を進めました。仮使用箇所も工区により変化していく複雑な現場で、安全な動線の確保、騒音や粉じん対策、重機の搬入経路の確保など、施工者の創意工夫で無事故で作業を進めることができました。

□完成後の地域への貢献度等

集約化した機能の1つとして町で唯一の公共交通であるバス停を設けたことで、計画や設計時期待していた以上に、賑わいが生まれています。円形の回廊は、朝6時から夜9時まで自由に出入りすることができる運用としており、回廊沿いに町内企業が作成した旭川家具の椅子やテーブルを配置して自由に使ってもらっています。サークル活動室はWEB予約に対応したスマートキーを導入して、利用者の利便性が向上し、管楽器演奏の練習などこれまでになかった利用が増えています。

令和7年度（第38回）北海道赤レンガ建築奨励賞

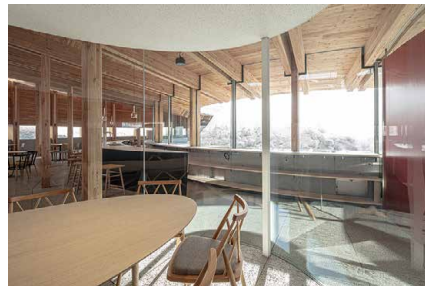
LUPICIA ニセコヴィレッジ 新本社棟

■建築主 ㈱ルピシアトレーディング

■設計者 ㈲ナスカ

■施工者 大成建設㈱札幌支店

■建築物の概要
所在地 北海道虻田郡ニセコ町羊蹄4番1の内、7番の内
主要用途 事務所
構造及び階数 木造平屋建
建築面積 681.05㎡
延べ面積 625.65㎡
施工年月日 令和5年(2023年)2月9日



撮影：浅川 敏

□企画の特徴

ルピシアは、本社機能を東京から北海道ニセコ町へ移転し、世界有数の豪雪地帯であるこの地の豊かな自然環境と共生する企業拠点を目指して「LUPICIA ニセコヴィレッジ 新本社棟」を計画した。敷地は羊蹄山やニセコアンヌプリを間近に望むロケーションに位置し、360度にわたって自然と接続する円環形の平屋構成を採用することで、すべての執務空間から風景を享受できる環境が整えられている。また、本施設は既存の茶園や工房群との連携を前提とした「ニセコヴィレッジ構想」の中核として位置付けられ、今後の地域発展とも密接に関係する計画である。

□設計の特徴

建築的には、中心に中庭を配した円環状の平屋構成により、全天候・全方位に対する開放性とゾーン間の流動性が確保されている。構造面では、北海道産カラマツを使用した在来木軸組工法と厚さ150mmのCLTパネルを組み合わせたハイブリッド構法を採用。これにより、積雪2mを超える厳しい自然環境下でも、大開口を持つ明快な構造形式を成立させている。使用されたCLTは約162m³、軸組材は約56m³に及び、木材の質感を活かした温かみある執務環境を実現しながら多くの炭素固定を実現した。また、北方建築総合研究所において降雪風洞実験を実施し、有害な雪庇や吹溜りができにくい形状であることを確認した。円環状にすることにより勾配屋根であっても落ちようとする雪が押し合い押し合い、結果として耐雪型の屋根を実現し、危険な雪下ろしを要さないようにした。

□施工の特徴

施工においては、豪雪地特有の条件に配慮し、CLTの採用によって屋根構成を簡略化しつつ、仮設足場の削減や工期短縮を図っている。CLTは構造体と内装を兼ねており、下地や仕上げの省略によって施工効率の向上にも寄与した。接合部には林野庁の建築実証支援事業に基づいて性能検証が行われたGIR（グリッドインサートリジッド）コネクタを採用し、CLTと鉄骨の信頼性あるハイブリッド接合を実現している。意匠的にも柱頭柱脚をすっきりと見せる設計が可能となっており、木構造の美しさがそのまま空間に現れている。さらに、CLTパネルは搬入効率を考慮し、歩留まりを向上させ、建材ロス削減も実現された。

□完成後の地域への貢献度等

竣工後、本社棟は企業活動の拠点としてだけでなく、地域との多面的な関わりを生む場としても機能している。今後は茶園、宿泊施設、公園などを段階的に整備し、観光・農業・教育が融合する地域共創型の「ニセコヴィレッジ構想」の基点となることが期待されている。オフィス内部では、集中・共創・交流といった働き方の多様性に応じてゾーニングされ、社員が自然環境の中で最適な場所を選びながら働ける「ハイブリッド・ワークプレイス」が実現している。中庭を中心とした空間構成は、外部の自然と内部の活動をつなぐ装置となっており、社員や来訪者が四季折々の風景と共に過ごす体験が日常的に生まれている。また、この建築は、道産木材の積極活用や先端接合技術の社会実証といった点でも注目されており、構造・施工面での実績は林野庁の補助事業報告等を通じて全国へ情報発信されている。地域に根差しつつ、技術的・文化的価値を併せ持つこの施設は、ニセコの新たなランドマークとして定着しつつある。

新入会員紹介 ようこそ建築士会へ

一緒に楽しんで、学んで、
そして発信しましょう!

健康第一で頑張ります! よろしくお願ひいたします!

庭山 愛由 (札幌支部)



■勤務先・仕事内容: 岩倉建設(株) 建築部設計課 ■入会年月日: 令和7年8月
■建築士会での活動: まだありません ■建築士会入会のきっかけ: 会社の勧め

自己PR

はじめまして。昨年8月より入会させていただきました庭山愛由と申します。現在は、一級建築士の学科試験合格へ向けて日々勉強に励んでおります。

出身は静岡県で、雪国に憧れて北海道の大学へ進学し、その後、ご縁があり道内で就職しました。社会人になると同時に一人暮らしも始め、昨年からは働き始めたばかりの新人です。勉強と生活の両立に苦戦しながらも、健康第一を心掛け、家事や勉強方法を試行錯誤しながら毎日過ごしています。

建築士を目指したきっかけは、家族と何気なく見ていたテレビ番組『大改造!! 劇的ビフォーアフター』です。住まいひとつで暮らしが大きく変わることに関心し、建築に興味を持ちました。

工業高校で建築を学ぶ中で、原広司さんや内藤廣さんの建築に惹かれました。大学の卒業旅行で友人と京都駅ビルを訪れ、迫力ある大空間に圧倒されました。やはり写真で見ると感動が大きく、実際に訪れることの大切さを感じました。建築に関することを知る中で、本を読む機会を増やしたいと思いながら、活字の

多い本にはなかなか手が伸びないのですが、内藤廣さんの著書『赤鬼と青鬼の場外乱闘』は楽しみながら読んでいます。

実務では分からないことが多く、日々学ぶことばかりですが、少しずつできることが増えていくことにやりがいを感じています。まだまだ未熟ではありますが、周囲の方々にご指導いただきながら少しでも早く仕事を覚えられるよう努めてまいります。今後もひとつひとつの経験を大切にしながら、建築について理解を深めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

建築士会に再入会しました。よろしくお願ひ致します。

山本 君美 (日高支部)



■勤務先・仕事内容: 新ひだか町役場 ■入会年月日: 令和6年12月
■建築士会での活動: 中標津全道大会に参加 ■建築士会入会のきっかけ: 支部長からのお誘いを受けて

自己PR

このたび、約20年ぶりに建築士会へ再入会しました。山本君美と申します。以前在籍していた際には、全道大会や全国大会に参加する機会をいただき、多くの学びと貴重なご縁に恵まれました。再び会の一員として活動できることを大変嬉しく思うとともに、新たな気持ちで歩みを進めていきたいと考えております。

私はこれまで約30年にわたり、公共施設の設計監理や建築確認審査業務等に携わってきました。また、不特定多数の方々を利用する施設に関わる中で、常に「利

用者の立場に立った建築」を大切にしていまいりました。近年では、建築が持つ社会的責任と役割の大きさを、より一層強く認識しております。

若い頃は目の前の業務に追われる日々でしたが、経験を重ねる中で、建築は単なる構造物ではなく、人々の暮らしや地域文化を支える基盤であると感じるようになりました。特に近年は、地域性や環境への配慮、そして長く使い続けられる持続可能な建築の重要性を意識しております。

また、約1年半前に新ひだか町へ移り住みました。豊かな自然と穏やかな気候

に恵まれたこの地域での暮らしを通じ、改めて地域の風土や文化の良さを実感しております。日高山脈を望む景観や太平洋に面した開放的な環境、軽種馬の生産地としての歴史、さらには「二十間道路」の桜並木など、この土地ならではの魅力は、建築のあり方を考える上でも大きな示唆を与えてくれています。

今後は、これまでの経験や建築士会での学びを大切にしながら、皆様との交流を通じて、さらに研鑽を深めていきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

二級建築士試験合格と建築士会入会にあたって

若林 大夢 (網走支部)



■勤務先・仕事内容: (株)中一建設 工事見積りや現場管理 ■入会年月日: 令和8年2月
■建築士会での活動: まだありません ■建築士会入会のきっかけ: 交流のきっかけを作りたいと入会

自己PR

このたび令和7年の二級建築士試験に合格して令和8年2月9日に北海道建築士会に入会することができ、大変うれしく思っております。

これまで、日々の仕事を通して建築の知識や経験の大切さを感じてきましたが、より専門的な知識を身につけたいと考え、二級建築士試験に挑戦しました。

建築士会へは、さまざまな分野の建築士の方々と交流し、知識や経験を広げたいと考えたことや、同世代で同じ仕事に携わる人が身近に少ないこともあり、何か交流のきっかけを作ればと思ったことが入会へのきっかけとなりました。

二級建築士の試験勉強では、特に難し

かったのが製図試験でした。一度目の受験では焦りもあり、課題条件の確認が不十分で、主要な室が一室不足してしまい不合格となりました。その反省を踏まえ、二度目の受験に向けては図面を早く描けるように練習を重ね、エスキスに十分な時間を確保できるように意識して取り組みました。その結果、二度目の挑戦で合格することができました。

私生活では昨年9月に子どもが生まれ、生活が大きく変わりました。慣れない育児で慌ただしい毎日ではありますが、子どもが少しずつ成長していく姿を見ることができるのは大きな楽しみでもあります。趣味としてお酒をたしなむことも好きですが、育児と試験勉強で今は

なかなか飲む機会がないのが少し残念でもあります。大変さもありますが、家族との時間に励まされながら充実した日々を過ごしています。

今回、二級建築士に合格し、建築士会に入会することができた背景には、試験や活動に対する会社の方々への理解と支援があり、大変感謝しております。

現在は、網走市の株式会社中一建設で工事見積りや現場管理などの業務に携わりながら、一級建築士試験の合格を目標に勉強を続けております。今後も業務を通して知識と経験を積み重ね、建築に携わる者として地域社会に貢献できるよう努力していきたいと考えております。

■ 苦小牧支部 苦小牧支部の近況と新たな一歩

副支部長
林 良介



新緑の候、会員の皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、当市における本年最大のニュースといえば、去る3月に執り行われた苦小牧市民文化ホール「アートキューブズ」のグランドオープンではないでしょうか。旧市民会館の老朽化に伴い、長らく待ち望まれていたこの新施設は、最新の音響設備や多目的な交流スペースを備え、早くも市民の文化活動の拠点として賑わいを見せています。

建物の呼称は、文化芸術活動（ART）の箱（CUBE）が積み重なった外観イメージから命名されました。施設呼称と建物形状を一致させることで、コンセプトをより身近に感じ、市民の皆様によく愛着を持っていただきたいという願いが込められています。

建築士の視点から見ても、その洗練された意匠やユニバーサルデザイン、さらには防災拠点としての機能性は、地域の技術と知恵の結晶であり、大いに刺激を受ける存在です。皆様もぜひ、その空間を体感していただきたいと思います。

一方で、当支部の大きな課題となっているのが会員の減少と高齢化です。近年の建築士不足は深刻で、募集をかけても応募がないという現状は、小規模支部共通の悩みでもあります。

この状況を打破すべく、当支部では会員増強と親睦を目的とした新たな試みとして、昨年7月に『建築士の集い！ビアパーティー2025』を開催いたしました。



ゴルフ大会

本会を「建築士および賛助会員」に限定した交流の場としたことで、新たに数社の賛助会員にご参加いただくことができました。また、賛助会員の中から数名の正・準会員の獲得に繋がったことは、大きな収穫です。

高齢等の理由による退会もあり、実質的な会員数に大きな変動はありませんでしたが、入会を促す流れを作れたことは確かな成果であると確信しております。

本年においても、引き続き『建築士の集い！ビアパーティー2026』やゴルフコンペの開催など、対面での交流に力を注ぎ、建築士会のさらなる発展へとつなげてまいります。



ビアパーティー

■ 名寄支部 便利なツールと青年委員会のこれから

青年委員長
大内 俊也



本会誌への寄稿依頼をいただき、本来であれば支部や青年委員会の活発な取り組みや、若手ならではの熱い議論の様子などを華々しくご報告すべきところなのですが…ここ最近、特筆して記事にするような目立った活動ができておらず、「一体何を書けばいいんだ……」と、パソコンの真っ白な画面を前に頭を抱えておりました。締め切りが迫る中、チカチカと点滅するカーソルを虚無の心で見つめながら、ふと「誰か代わりにいい感じの原稿を書いてくれないかな」という甘い誘惑が脳裏をよぎったのです。

そこで思い至ったのが、「生成AI」の存在です。もちろん機密

情報の入力には制限があり、何でも手放しで丸投げできるわけではありませんが、特性を理解して使いこなせば、業務上においてもこれほど頼もしい相棒はいません。

例えば、膨大なページ数に及ぶ資料のチェック、過去の類似案件のデータ整理、あるいは説明資料の構成案作りなど。ゼロから人間がウンウンと唸って作業するには骨が折れる業務でも、AIに「この条件で要点をまとめて」と指示を出せば、ほんの数秒で叩き台を作ってくれます。こうした下準備を思い切って任せることで、本質的な業務性能の向上や、現場での円滑なコミュニケーションにこそ時間とエネルギーを注げるはずです。

そんなわけで、「書くことがない」という私個人のピンチを、話題の最新テクノロジーにかこつけ

て何とか文字数まで膨らませてみた次第です。

……さて、ここまでもっともらしいことを書き連ねてまいりましたが、皆様はすでにある疑念を抱いているかもしれません。「ネタがないと悩んでいた人間が、やけに流暢な文章を書いているな」と。

この原稿が私の汗と涙の結晶なのか、優秀なAIの力作なのかは皆様のご想像にお任せいたしますが、今後はこうした便利なツールも上手く業務に取り入れて少しでも余裕を作り、その浮いた時間を使って、なんとか支部や青年委員会の活動もゆるく盛り上げていきたいらな……なんて都合の良いことを考えております。次回の寄稿の際には、AIに頼らずとも書けるような楽しい活動報告ができればと考えています。

北海道建築士会本部において、新たに事務局長が就任いたしました。伊藤事務局長の退任に伴い、4月より田辺伸二事務局長が着任しております。事務局員3名とともに、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

